

巻 頭 言

栗屋 剛（岡山大学）

本誌「北海道生命倫理研究」は、第2号を発刊するに至った。継続的な研究会ジャーナルとしての体裁を整えつつあることは、誠に喜ばしく感じている。

「北海道生命倫理研究」は、研究会活動の成果として編集されているものである。研究会とは、毎年夏季セミナーと冬季セミナーという形で2回開催されている。これまで、高齢化社会に関する報告が多くなされ、治療の差し止め代表される終末期医療の倫理的問題のみならず、認知症に関する地域包括ケアなどの社会福祉的な取り組みや成年後見制度が紹介され、独居高齢者をめぐる精神的・社会的状況に関する研究報告がなされた。

高齢者が重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援を総合的に提供する、地域包括ケアシステムが整備されることが、介護保険法改正に伴い、地方自治体に要請されることとなった。但しこのシステムは、医療機関はもとより、福祉施設、介護事業者、そして市民や自治体が協力して構築していかなければならないことがセミナーで報告されており、行政任せにしておいて成せるものではない。この成果は、早い段階で市民一般にも伝えられる必要があるといえよう。成年後見制度という用語自体はかなり普及をみてきたものの、その問題点ばかりが報道で取り上げられがちのため、社会的に否定的なイメージを持たれている。これに対しセミナーでは、一般市民が社会貢献の一環として市民後見人に就任する制度や、市民後見人養成の取り組みなどについての報告がされた。

近年日本社会は、障害者や高齢者の孤立死の報道が札幌を含めて全国でなされる状況を迎えているが、そうした孤立死を防ぐ社会的な枠組みが整備されつつあることは、社会一般はもとより、医療者や研究者にもあまり知られていない。こうした中、独居高齢者の精神的・社会的状況は、現在セミナーでは中核的位置を占める研究課題となっている。研究グループからは、実際の独居高齢者からの聞き取りの内容と、これからの研究の方向性に関して報告がなされている。それによると孤立死は、死亡原因が特定されにくいなど保健行政上も問題とされうるが、高齢者の独居それ自体は、これまでの既成概念とはやや様相が異なり、必ずしも否定的な側面ばかりでないことも示唆されている。独居と独立、孤立の関係については、哲学的にも社会的にも本研究会で考察が深められることを期待している。

以上のとおり、北海道生命倫理研究会は、これまで主として高齢化社会における医療と福祉を中心に上げてきたが、生命倫理をめぐる問題はこれにとどまらず、生殖医療の発展や臓器移植、更には人体利用一般、疾病の治療を超えて医療技術を利用するエンハンスメント等も大きな関心を集めている。今後本研究会も、これら生命倫理に関する新しいテーマにも順次取り組んでいくことが期待される。また、北海道で活動している他の医療・生命倫理関係の研究グループとの協働の可能性も想定される。その先駆的な試みになるかもしれないが、2013年12月には、本セミナーの中心的な役割を担っているメンバーが属する全国学会が、札幌で市民公開講座を開催した。本セミナーの活動内容が、先に述べたとおり一般市民にも伝えられる意義が大きいことから、今後セミナー自体としても何らかの形で市民向けに研究活動を発表する機会が設けられることが望ましい。

本誌では依頼論文に始まり、いくつかの原著論文、生命倫理に関連する資料や報告、学会レポートも掲載され、北海道での研究を中心としつつも、日本の生命倫理研究全体を視野に収めようとの意欲がうかがえる。発行部数は必ずしも多くはないが、生命倫理の分野で北海道および全国で中心的な役割を担っている研究者には努めて送付していると聞いている。また、本誌を受け取った研究者には、是非とも北海道での生命倫理研究に関心を向け、近くの研究者との歓談の際には本誌に関して話題に乗せてもらいたいと期待している。